

令和2年5月8日

●目に青葉 山ほととぎす 初鰹(はつがつお)

～今がちょうど旧暦「卯月」です～

①古文の予習は進んでいますか。『和泉式部日記』冒頭の時節は「卯月十余日」とありますが、「旧暦カレンダー」では、本日は「4月16日」となっており、ちょうど今の季節と重なります。

②冒頭の句は、江戸時代の山口素堂という俳人の句で人口に膾炙(人々に知れ渡る)しているはずですが(が聞いたことはありませんか)。目には「新緑」、耳には「ほととぎす」の声、そして、食卓には「鰹」がのぼり、「初夏」の清々しさや楽しみが伝えられています。

③数年前のことになりますが、音楽科のF先生が古典の授業見学に来られ、折しもこの『和泉式部日記』の場面の時で、「卯の花の 匂ふ垣根に ほととぎす 早も来鳴きて 忍音もらす 夏は来ぬ」という唱歌(「夏は来ぬ」)を、とっさの依頼でしたが披露してくださいました。もし、機会があれば、F先生にリクエストしてみてください。

④皆さんの電子辞書では、「ほととぎす」の声も再生してくれますので、是非一度、その独特の鳴き声を確認してみてください。「テッペンカケタカ」と聞こえるとか、早口言葉にある「東京特許許可局」(トッキョキョカキョク)と聞こえるとかありますが、皆さんの耳にはどのように聞こえるでしょうか。昼夜を問わず鳴くそうです。

⑤漢字表記もとてもたくさんあります。杜鵑、杜鵑、不如帰、不如帰…今漢字変換しても次々出てきます。それほど親しまれた鳥なのでしょう。

⑥戦国武将の織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三人の性格の違いを伝えるものとして、そこにも「ほととぎす」が使われたりしていますね。

「鳴かぬなら殺してしまえ ホトトギス」(信長)…短気

「鳴かぬなら鳴かしてみせようホトトギス」(秀吉)…自信家

「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」(家康)…辛抱強い…等。

⑦そして、忘れてはならないのは正岡子規です。「子規」は俳人としての名前(俳号)ですが、「ほととぎす」を意味します。肺結核に苦しみ、ひどく喀血(血を吐く)する様とほととぎすの鳴き声を重ねて、そう自身を名付けたと言われています。

⑧さて、『和泉式部日記』冒頭には、この「ほととぎす」が登場します。「ほととぎす」は、もう一つの話題である「橘(の花)」からの連想で詠みだされたものです。「ほととぎす」が実際に鳴いているわけではありません。

⑨「花札」で有名なように、「花」と「鳥」はセットです。春なら「梅に鶯」となるように、夏ならば、「橘とほととぎす」がその典型です。

⑩亡くなってしまった恋人を連想させる「橘の花」を、兄である敦道親王から渡された和泉式部は、すかさず、「橘の花」もいいけれど、その枝に止まる「ほととぎす」の方に興味がある、しかもその「鳴き声」を実際に聞いて確かめたいと大胆に詠みかけます。

⑪「橘の花」が「亡き恋人」を暗示するように、「ほととぎす」も「新しい(恋)人」を暗示するのです。

⑫和歌における「もの (=橘、ほととぎす)」と「人の心 (=会ってみたい)」とは、たとえばこういうものです。

⑬和泉式部とこの新しい恋人となる敦道親王の二人は、このようにして「和歌」のやり取り、駆け引きを通じて思いを深めあっているのです。和泉式部もまた、類まれな歌詠みの名手であり、それが「恋多き女性」と評される所以にもなるのです。